厚生労働科学研究費補助金　エイズ対策政策研究事業
都市部の若者男女におけるHIV感染リスク行動に関する研究

Webによる若者のHIV/STI感染リスク行動に関する行動疫学研究

研究代表者：日高　庸晴　（宝塚大学看護学部　教授）

研究要旨

都市部在住の若者におけるHIV/STI感染リスク行動の実態を明らかにすることを目的に、インターネット調査会社に登録されている札幌市在住者を対象に無記名自記式質問票調査を実施した。これまでの性経験の相手が異性のみである男性650人、女性650人から回答を得た。

「性感染症にかかっているとHIVにかかりやすい（男性38.3%、女性31.8%）」「今、日本で梅毒が流行している（男性59.2%、女性51.8%）」といったHIV/STI一般知識の正答率は男性が高率であり、「性感染症に感染しても症状が出ないことがある（男性64.0%、女性65.2%）」「エイズにかかるとすぐに死ぬのではないかと思う（男性68.5%）、女性（66.5%）」は同程度であった。HIV抗体検査の生涯受検歴は男性全体で13.7%であり年齢階級による違いななく（20代14.9%、30代13.5%、40代13.5）、女性では24.9%（20代22.2%、30代28.6%、40代24.0%）であり生涯受検歴と年齢階級との関連はなかった。全体の7割弱に過去6ヶ月間に性行動があり、恋人・パートナーや配偶者など特定の相手のみの者は、男性では80.6%、女性では93.9%、過去6ヶ月間のセックスパートナーの人数が複数であった割合は男性で29%、女性では10.9%であった。膣性交におけるコンドーム常時使用率は男性34.7%、女性30.8%であった。これらの情報をもとに実態に即した予防啓発メッセージの開発とその実施が必要である。

A. 研究目的

わが国ではこれまでMSMを中心にHIV感染の拡大があり喫緊の課題として捉えられ、今なおその状況は続いている。その一方、梅毒など性感染症はMSM以外の集団にも顕著な流行が発生しており、MSM以外の集団も含めた国民への有効な啓発方法の確立が急がれる。本研究班では限られた資源等の中で、国民一般といった大多数を対象とするのではなくこれまでの疫学データから at risk population が高い割合で含まれると推測される都市部在住かつ性的に活発な若者や、既にSTI感染不安・クリニック受診者を主要な対象に取組をしていく。その中で、比較対照となる集団の動向を把握すると同時に、啓発の試行や介入メッセージの開発に資する集団としてインターネット調査会社に登録する都市部在住モニターを対象に、行動疫学調査を実施する。研究1年目は東京23区・大阪市・福岡市在住者からの回答を得たが、夜中の繁華街に集まる若者の実態把握のために実施するクラブ調査の調査地に札幌が加えられたことを鑑み、2年目はこれまでの性経験が異性のみかつ札幌市在住者の回答を得た。

B. 研究方法

インターネット調査会社のモニター登録者を対象に、HIV/STIに関する知識や性行動の実際、生育歴等について無記名自記式の質問票調査を実施した（実施時期：2018年12月）。調査の実施にあたっての取込基準は20～49歳であること、札幌市在住の男女であること、調査対象人数はこれまでの性経験が異性のみの男性・女性各650人とした。質問票はNPOや当事者支援活動団体および国内先行研究を参考にHIV/STIに関する一般知識、HIV抗体検査受検歴、STI既往歴、過去6ヶ月間の性行動（セックスの相手の種別、人数、コンドーム使用状況）、出会いの手段、生育歴等によって構成した。

（倫理面への配慮）

本研究の実施にあたり、宝塚大学看護学部研究

倫理委員会による研究計画の審査と承認に基づき実施すると共に、質問票回答前に厚生労働科学研究の一環として実施する調査であることを記し、研究参加の同意を得られた場合のみ回答を求めた。

C. 研究結果

札幌市在住かつ異性のみ性経験がある男性 650 人、女性 650 人の計 1,300 人からの回答を得た。平均年齢は男性 38.4 歳、女性 34.9 歳、大卒以上の学歴割合は男性 52.6%、女性 30.9%であった。

男性におけるこれまでに性的な魅力を感じたことがある相手が同性のみは 2.9%、同性・異性の両方は 3.5%、異性のみ 92.6%、同性・異性いずれにも魅力を感じたことがない 0.3%であった。女性においては、これまでに性的な魅力を感じたことがある相手が同性のみは 2.8%、同性・異性の両方は 10.8%、異性のみ 84.5%、同性・異性いずれにも魅力を感じたことがない 0.9%であった。

本稿では、1 年目の研究結果報告同様に質問票中の主たる項目である HIV/STI 知識（表 2)、HIV 抗体検査受検歴および受検場所、STI 既往歴（表 3)、パートナーの有無、過去 6 ヶ月間の性行動（表 4、5)、生育歴（表 7)、精神保健医療の受療歴（表 8) について報告する。その他の項目については表を参照されたい。

HIV/STI 知識（表 2)

「性感染症にかかっていると HIV にかかりやすい」の正答率は、男性 38.3%（20 代 48.6%、30 代 38.2%、40 代 35.8%)、女性 31.8%（20 代 32.4%、30 代 28.1%、40 代 35.0%）であった。「今、日本で梅毒が流行している」の正答率は男性 59.2%（20 代 58.1%、30 代 60.8%、40 代 58.0%)、女性 51.8%(20 代 50.0%、30 代 53.5%、40 代 52.1%)、「性感染症に感染しても症状が出ないことがある」の正答率は男性 64.0%（20 代 68.9%、30 代 64.9%、40 代 61.8%)、女性 65.2%（20 代 72.2%、30 代 66.4%、40 代 57.1%)、「エイズにかかるとすぐに死ぬのではないかと思う」男性 68.5%（20 代 64.9%、30 代 71.2%、40 代 66.7%)、女性 66.5%(20 代 66.7%、30 代 68.7%、40 代 64.1%)、「女性の場合、HIV の検査には内診がある」男性 17.8%(20 代 12.2%、30 代 18.1%、40 代 19.1%)、女性 22.3%（20 代 22.2%、30 代 18.0%、40 代 26.7%)、「その日のうちに結果がわかる HIV 検査がある」男性 24.3%(20 代 23.0%、30 代 25.0%、40 代 24.0%)、女性 20.6%（20 代 18.1%、30 代 21.7%、40 代 22.1%）であった。

HIV 抗体検査受検歴（表 3)

生涯受検歴は男性で 13.7%（20 代 14.9%、30 代 13.5%、40 代 13.5%)、女性では 24.9%（20 代 22.2%、30 代 28.6%、40 代 24.0%)、過去 1 年間の受検歴は男性で 3.4%（20 代 6.8%、30 代 4.2%、40 代 1.7%)、女性では 8.5%(20 代 12.0%、30 代 10.1%、40 代 3.2%）であった。生涯受検歴と年齢に関連はなかったが、過去 1 年間の受検歴においては女性の 10 代が高率であった。

HIV 抗体検査受検場所（表 3)

生涯受検経験がある者の受検場所は男性では保健所や保健センターが 37.1%、病院・クリニックなど医療機関が 64.0%、女性では保健所や保健センターが 13.6%、病院・クリニックなど医療機関が 78.4%であり、圧倒的に病院・クリニックでの受検経験が多かった。

STI 既往歴（表 3)

梅毒・A 型肝炎・B 型肝炎・クラミジア・淋菌感染症・尖圭コンジローマ・性器ヘルペスといったいずれかの性感染症の診断を受けたことがある割合は、男性で 14.2%(20 代 12.2%、30 代 13.9%、40 代 14.9%)、女性では 26.3%（20 代 27.8%、30 代 30.9%、40 代 20.3%）であった。年齢階級別では男性においては 30 代と 40 代は同程度、女性においては 30 代が最もその割合が高い傾向にあった。

パートナーの有無（表 4)

男性におけるパートナー有無の状況は、男性のパートナーがいる者は 2.8%、女性のパートナーがいる者は 70.2%であった。女性においては男性のパートナーがいる者は 74.6%、女性のパートナーがいる割合は 0.5%であった。

過去 6 ヶ月間の性行動（セックス経験率、人数、コンドーム常時使用率）（表 4、5)

過去 6 ヶ月間のセックス経験率は男性では 68.9%(20 代 82.4%、30 代 69.4%、40 代 64.9%)、

女性で63.5%（20代77.8%、30代65.4%、40代47.5%）であった。過去6ヶ月間における膣性交におけるコンドーム常時使用率は男性34.7%（20代 50.0%、30 代 34.5%、40 代 29.8%）、女性30.8%(20代36.4%、30代25.4%、40代29.0%)であり、若年層の使用率が高率であった。

過去6ヶ月間のアナルセックス経験率自体が低率であったが、経験者における常時使用率は男性27.1%(20代33.3%、30代25.0%、40代26.3%)、女性では30.4%（20代40.0%、30代29.4%、40代11.1%）であった。

過去6ヶ月間の妊娠を目的としない性交時のコンドーム不使用理由は、男性・女性共に「つけない方が気持ちいいから」が最多であり、男性では「一体感が欲しかったから」、女性では「コンドームが手元になかったから」が次に続いた。

生育歴（表7）

小・中・高時代におけるいじめ被害経験率は男性では28.5%（20代25.7%、30代26.7%、40代30.9%）、女性では38.0%（20代38.0%、30代42.4%、40代33.6%）であった。「男女間のエイズ予防について習った」経験は男性で22.8%（20代47.3%、30代27.8%、40代11.5%）、女性では27.7%(20代42.6%、30代31.8%、40代8.8%)、「男性同士のエイズ予防について習った」経験は男性においては7.1%(20代20.3%、30代6.6%、40代4.2%)、女性においては5.7%(20代8.3%、30代6.5%、40代2.3%）であり共に低率であった。

精神保健医療受療歴（表8）

心理カウンセリング・心療内科・精神科のいずれかの精神保健利用受療歴について尋ねたところ、生涯受療率は男性で19.7%（20代18.9%、30代18.8%、40代20.8%）、女性では24.5%（20代21.8%、30代29.0%、40代22.6%）であり、そのうち半数は過去6ヶ月間にも受療歴があることが示された。

D. 考察

HIV/STI 一般知識は研究1年目の結果と比しても概ね同様の結果であった。「梅毒の流行」「性感染症に感染しても症状が出ないことがある」「エイズにかかるとすぐに死ぬのではないかと思う」の正答率は一定程度浸透していることが示唆された。一方、「性感染症にかかっているとHIVに感染しやすい」「HIVの検査には内診がある」については知識が浸透しておらず、誤解が広がっている状況が確認されている。

HIV抗体検査生涯受検率および過去1年間受検率は概して低率であった。生涯受検歴は年齢と関連がないが、過去1年間の受検歴は若年層ほど高率であった。受検場所は病院・クリニックが圧倒的に多く、都市部在住者ゆえ保健所や保健センター以外においても受検しやすさがあるなど、検査機会の選択肢があるとも言えよう。

また、STI 既往歴は一定数あり、男性においては年齢との関連はなく、女性においては 20 代と30代に既往歴が比較的高かった。過去6ヶ月間のコンドーム常時使用率は 30%程度であり概して低く、さらなる啓発と予防介入のニーズがある。学齢期におけるいじめ被害経験率はLGBTsを対象にした国内先行研究に比較すると、明らかに低率であった。また、「男女間のエイズ予防教育」の習得は20代で半数近く、30代においては3分の1程度であった。回答者自身の記憶バイアスの影響を考慮しなければいけないが、一時期ほどエイズ予防教育が実施されていない可能性も考えられる。「男性同性間におけるエイズ予防教育」の習得は全体では圧倒的低率であるが、20代に限定すれば他の年齢層よりもその割合が高かった。MSMにおけるHIV流行があるわが国において、学校教育においてはこれらの情報が届いていないことがこれまでのMSM対象の行動疫学調査においても示されてきたが、改めてそれを裏付ける結果であるとも言えるだろう。

本研究はインターネット調査会社の登録モニターを対象にした調査であるため、回答者の基本属性や行動等に一定の傾向や偏りの可能性があると考えられるため、それらを考慮したうえで集計結果を解釈する必要がある。しかしながら、本研究班は札幌のクラブに来訪する若者の行動疫学調査を実施しており、クラブ調査の結果と比較することや札幌在住者を対象にした予防介入プログラム開発の基礎情報にするなど、有効に活用

していくことが望まれる。

E. 結論

札幌市在住の 20～40 代の HIV 感染リスク行動の一端が示されたことにより、当該地域在住のインターネット利用層の HIV/STI 予防啓発ニーズが明らかになった。同時に、同地域で実施しているクラブ調査の研究参加者の回答結果と比較可能なデータセットを整備出来た。

F. 発表論文等

1. 論文発表

（英文）

1. Matsutaka Y., Koyano J., Hidaka Y. : Perceptions of reducing HIV-preventive behaviors among men who have sex with men living with HIV in Japan. Health. Health, 2018, 10, 1719-1733.

（和文）

1. 日高庸晴：LGBTs 支援の最前線に立つ教員に求められる役割，子どもと健康，労働教育センター，107：4-13，2018.
2. 日高庸晴：LGBTs のいじめ被害・不登校・自傷行為の経験割合　ー全国インターネット調査の結果からー，現代性教育研究ジャーナル，日本性教育協会，89：1-7，2018.
3. 日高庸晴訳：レインボーフラッグ誕生物語　セクシュアルマイノリティの政治家ハーヴェイ・ミルク，　ロブ・サンダース作，スティーブン・サレルノ絵，汐文社，2018.
4. 日高庸晴：LGBT の児童生徒が学校現場で直面する困難，教室の窓，東京書籍，4 月号：28-29，2018.
5. 日高庸晴：ゲイ・バイセクシュアル男性の生きづらさと健康リスク行動，モダンフィジシャン，新興医学出版社，印刷中.

2. 学会発表

（国内）

1. 合田友美，松高由佳，萬田和志，中村圭奈子，日高庸晴：HIV/STI 郵送検査を受検する若者男女の性感染症に対する認識と予防行動の特徴，第 37 回日本思春期学会総会・学術集会　シンポジウム（2）「性教育の未来を語る」，2018，東京.
2. 日高庸晴：性的指向と性自認を視野に入れたエイズ予防教育の実現を，第 32 回日本エイズ学会学術集会　特別講演，2018，大阪.

G. 引用

なし